

作家解説

足立源一郎　あだち・げんいちろう　1889-1973

大阪に生まれる。1906年の関西美術院開設とともに、同校で浅井忠や鹿子木孟郎に師事。1908年に上京後、白馬会研究所や東京美術学校で学ぶ。1914年に渡仏。キュビズムやフォーヴィスムに接し、独自の明るい画風を確立する。1918年に帰国後は日本美術院洋画部同人となるが、1920年小杉未醒ら洋画部同人とともに脱退。1922年春陽会創立に参加し、翌年から3年間、再びフランスに遊学した際に作品を日本へ送るなどして、晩年まで同会に出品を続けた。1920年代の後半からは、とくに山をテーマとした作品を多く描き、1936年に日本山岳画協会を創立。その後半生は山岳画家として活躍した。

今関啓司　いまげき・けいし　1893-1946

現在の千葉県長生郡長南町に生まれる。日本美術院研究所で学び、1915年に第1回日本美術院習作展と第1回草土社展に出品した。1916年再興第3回院展で樗牛賞を受賞。1917年の第3回日本美術院試作展では洋画部と日本画部の両方で奨励賞を受賞し、翌年院友となる。1922年春陽会創設にあたり、客員として参加（1924年会員）。その後、一面舎、彩應会などで活動を共にした山崎省三の妹・静と1926年に結婚。《母子》は、妻と1932年に生まれた長女の利根美を描いた素描。《牛爪を切る図》《花》のような水墨画も精力的に描いている。

入江　観　いりえ・かん　1935～

現在の栃木県日光市に生まれる。日光町立第一国民学校（現・市立日光小学校）で谷田貝憲介から油絵の手ほどきを受ける。東京藝術大学美術学部藝術学科在学中に加山四郎に学び、1956年第33回春陽会展に初入選。同年から春陽会研究所で岡鹿之助や三雲祥之助らの指導を受ける。1962年政府給費学生として渡仏。1964年帰国後、春陽会会員となり、現在まで同会で活躍している。

梅原龍三郎　うめはら・りゅうざぶろう　1888-1986

京都に生まれる。聖徳観洋画研究所で浅井忠に学んだ後、1908年渡仏、ルノワールに師事する。帰国後、1914年に二科会、1922年に春陽会の結成に参加。1925年国画創作協会に洋画部を設ける。1935年帝国美術院会員、1944年東京美術学校教授に就任、また帝室技芸員にも選出された。戦後、豊かな装飾性と自在なフォルムによる、生命感あふれる画風を確立。1952年に東京美術学校を退官、同年文化勲章を受章した。

加山四郎　かやま・しろう　1900-1972

神奈川県横浜市内に生まれる。東京美術学校西洋画科を1927年に卒業。この間、1926年に第4回春陽会展に初入選し、1928年の第6回同展で春陽会賞を受賞する。以後、晩年まで春陽会を主な活躍の場とした。1930～1933年にかけてフランス留学。帰国後は1934～1941年にかけて自由学園で美術を指導し、1938年に春陽会会員となる。1953年、東京藝術大学講師となり、1968年の定年退職まで後身の指導に力を注いだ。

木村荘八　きむら・しょうはち　1893-1958

牛肉店いろはを経営する木村荘平の第八子として、東京に生まれる。白馬会美術洋画研究所で知り合った岸田劉生らとフュウザン会、草土社を結成。二科展や日本美術院洋画部にも出品した。1922年に春陽会が発足した際には客員として参加。翌年、会員に推挙され、以後は中心的な画家の一人となり、小杉放菴とも親しい友人関係を築いた。永井荷風の『溷東綺譚』、大佛次郎の『霧笛』など、多くの挿絵も手がける。1958年、演劇出版社から『東京繁昌記』が刊行される直前に死去。翌年、本書の絵と文により、日本芸術院賞恩賜賞が贈られた。

倉田白羊　くらた・はくよう　1881-1938

現在の埼玉県さいたま市に生まれる。本名は重吉。浅井忠に師事後、東京美術学校西洋画科撰科で学ぶ。1902年太平洋画会会員。文展には1907年の第1回から入選している。1910年から翌年にかけて美術文芸誌『方寸』の編集に参加。1915年日本美術院洋画部同人となるが、1920年他の洋画部同人とともに脱退し、1922年の春陽会創立に参加する。同年、山本鼎が提唱する農民美術運動に協力するため、長野県上田市へ移住。農民美術の振興や農村産業の普及に尽力すると童子に、山村生活に根ざした風景画を多く描いた。1935年糖尿病のために失明の危機に瀕し、伊豆や外房で静養するも1938年9月に失明、11月に死去した。

小杉未醒／放菴　こすぎ・みせい／ほうあん　1881-1964

現在の栃木県日光市に生まれる。本名は国太郎。五百城文哉の内弟子となる。1899年小山正太郎主宰の不同舎で学ぶ。この頃（未醒）と号し、太平洋画会に参加。1904年日露戦争に記者として従軍。欧州留学から帰国した1913年、再興された日本美術院に同人として参加し洋画部を率引。1919年まで出品したのち、1920年洋画部同人らと連袂脱退。このメンバーを中心に1922年春陽会を結成し、以後、同会を主な発表の場とする。1923年から《放菴》の号を併用し始め、1933年末《放菴》へ改号し、制作は日本画が中心になっていく。1945年新潟県新赤倉の別荘に疎開し、この地に永住する。

坂口右左視　さかぐち・うさみ　1895-1937

現在の佐賀県唐津市生まれ。関西美術院で鹿子木孟郎に学んだ後上京、日本美術院研究所に入所。1918年再興第5回院展洋画部に初入選する。この頃から京都を拠点に活動が続けた。翌年の第5回日本美術院習作展で乙賞を受賞。日本美術院洋画部解消後は春陽会に参加し、1923年の第1回展、1925年の第3回展で春陽会賞を受賞し、無鑑査となる（1931年会友）。1928年からは日本創作版画協会展にも出品。山崎省三・今関啓司たちと親しく、一面舎や彩應会などの活動も共にしたが、1934年創立会員への不満から、林俊衛・別府貫一郎らと春陽会を退会する。1937年京都市東村山で静養中、数えて43歳という若さで病死した。

田中善之助　たなか・ぜんのすけ　1889-1946

京都に生まれる。聖徳観洋画研究所、関西美術院で学んだ後、浅井忠の内弟子となる。1908年第2回文展に初入選。関西美術会展にも出品を続け、注目される。1911年に田中喜作・黒田重太郎・土田麦樗らと黒猫会を結成し、ポスト印象主義などを研究して京都の美術界に一石を投じた。1920年から1923年にかけて欧州遊学。帰国後、春陽会の客員となり第1回展に滞欧作を発表する。その後は京都に在住し、関西美術院で指導するとともに、京都市美術展では創立時から審査員をつとめた。1932年に春陽会系の同志たちと新興美術協会を創立。牡丹や舞妓などを題材に、大胆な筆触と鮮やかな色彩による画風を確立した。

中川一政　なかがわ・かずまさ　1893-1991

東京本郷に生まれる。1914年から油絵を始め、1915年岸田劉生を訪ね、草土社に同人とし

て参加。1921年の第8回二科展で二科賞を受賞。1922年に春陽会の創立に客員として参加。1927年、小杉放菴が主宰する老社会に参加して、中国の古典に親しむ。帝展改組後、1938年からは新文展審査員を依頼されている。戦後の1953年にアメリカ、ブラジルを経て、翌年、ヨーロッパをまわり帰国。その後中国も旅している。油絵だけでなく日本画、書、篆刻、陶芸、装丁、さらには文筆まで、その活動は幅広く、1975年文化勲章を受章する。晩年には、松任市と真鶴町、2つの美術館が開館した。

中西静男　なかにし・しずお　1909-1981

現在の静岡県富士市に生まれる。小学校時代に上田市に転居。1924～1930年にかけて倉田白羊の内弟子となる。その後、1934年まで日本農民美術研究所の研究員をつとめ、倉田家の近くに住み、白羊が亡くなるまで世話をしながら、指導を受ける。この間、1932年に第10回春陽展に初入選。白羊没後は伊川鷹治や岡鹿之助に師事した。第二次世界大戦中は日本無線上田工場に徴用工として勤務。戦後、労働組合の委員長をつとめる。日本アンデパンダン展や長野県展に出品を続け、1968年には第一法規賞を受賞。上小美術会長時代に上小美術展を創設。また、信州版画協会の創立に参加して木版《村の学校》などを発表した。

長谷川　潔　はせがわ・きよし　1891-1980

神奈川県横浜市内に生まれる。白馬会美術洋画研究所で黒田清輝から素描を、本郷洋画研究所で岡田三郎助・藤島武二から油絵を学ぶ。この頃から自画自刻の木版画制作を始め、1913年から翌年にかけて『聖盃』『仮面』『水滸』といった文芸誌の装画や挿絵を手がけた。1916年永瀬義郎・廣島晃南らと日本版画倶楽部を結成し創作版画展を開催。1918年に渡仏し、様々な版画技法の研究を行い、古典銅版技法マニエール・ノワール（メゾチント）を復活させ注目を集める。フランスの美術展で実績を重ね、1930年の第1回「航空と美術」国際展では《アレクサンドル三世橋とフランスの飛行船》により航空大臣一等賞を受賞。この頃、滞仏中の長谷川昇からの誘いで春陽会会員となり、1930年第8回春陽会展に23点を出品。その後も毎年出品を続けた。1966年にはフランス文化勲章を授与されている。

原　精一　はら・せいいち　1908-1986

神奈川県に生まれる。1923年中学校在学中に萬鉄五郎の指導を受け、川端画学校でも学ぶ。1927年から春陽会へ出品し、1936年春陽会賞を受賞。翌年会友となるが、応召され戦地に赴く。1942年中国から帰還し、春陽会展で岡田賞を受け春陽会会員となる。翌年再び応召、1946年タイでの抑留生活を終えて帰国する。戦後の1948年に春陽会を退会し、国画会に参加するが、1967年に国画会も退会。以後は無所属となり、国際彫象展などに出品しながら、1975年に女子美術大学の教授に就任。後進の指導に尽くした。

古川龍生　ふるかわ・りゅうせい　1893-1968

現在の栃木県小山市に生まれる。本名は龍夫。1924年に東京美術学校日本画科を卒業後、5年間日本創作版画協会に出品。1929年第7回春陽会に初入選。1931年には日本版画協会にも参加し、戦後にかけて春陽会と日本版画協会をメインに作品を発表していった。版画作家でありながら、その複数性よりも、版画が持つ色彩表現の可能性を追及することにこだわったため、一枚しか刷られていない作品が少なくない。

三岸節子　みぎし・せつこ　1905-1999年

愛知県に生まれる。1921年上京後、本郷洋画研究所で岡田三郎助に学ぶ。翌年、女子美術学校の2年に編入学し、1924年首席で卒業。同年に三岸好太郎と結婚するが、1934年に死別。この間、春陽会の1925年第3回展に女性では初めて入選。その後も入選を重ねたのち、独立美術協会、新制作協会に所属し、1946年女流画家協会の創立に参加するが、後に退会。1948年から菅野主介と婚約関係にあったが、1953年に破局。翌年息子がフランス留学していたのを機に一年ほどヨーロッパをまわる。1964年神奈川県大磯町にアトリエを構え、それまで静物中心であったモチーフに風景が加わる。1968年息子一家とフランスへ移住し、1989年に帰国。1994年女性洋画家初の文化功労者となり、94歳で亡くなる直前まで制作を続けた。

水谷　清　みづたに・きよし　1902-1977

岐阜県郡上郡生まれ。小杉放菴に師事しながら川端画学校でも学ぶ。のち、放菴の娘・百合子と結婚。1926年第4回春陽会に《裸女群浴》他一点で初入選し、以後、主に同会を舞台に活躍する（1933年会員）。1936年、同志と文芸日本協会を創立し機関誌『文芸日本』を刊行。1956～1967年にかけて金沢大学教授、1959年から早稲田大学講師もつとめた。

野見山曉治　のみやま・ぎょうじ　1920-2023

現在の福岡県飯塚市に生まれる。1938年に上京し、同舟舎洋画研究所に通う。同年東京美術学校に入学。1948年自由美術家協会展で受賞。1952年渡仏。1958年第2回安井賞を受賞する。東洋画への新たな興味を感じて1964年帰国。1968年から1981年まで東京藝術大学で教鞭をとる。文筆にも優れた才能を発揮し、著書を多数発表。1978年には『四百字のデッサン』で日本エッセイスト・クラブ賞を受賞する。1992年芸術選奨文部大臣賞受賞、1994年福岡県文化賞、1996年毎日芸術賞、2000年文化功労者に選ばれ、2014年文化勲章受章。

山崎省三　やまざき・しょうぞう　1896-1945

現在の神奈川県横須賀市に生まれる。幼くして父を亡くし、母の実家がある新潟で育った後、北海道へ移住。1915年に上京、日本美術院研究所で小杉未醒や山本鼎に学ぶ。翌年の再興第3回院展洋画部に初入選。村山槐多・今関啓司とあわせて美術院研究生の三銃士と称された。1920年に日本美術院を脱退し、1922年春陽会創立に客員として参加。並行して山本鼎の自由画教育や農民美術運動にも協力。夭折した村山槐多の遺稿『槐多の歌へる』や『槐多画集』の編集なども行った。1929年から約1年間欧州遊学。1935年の帝展改組にともない春陽会を退き、1937年から新文展に出品する。1945年、ベトナムのハノイで戦病死した。

山本　鼎　やまもと・かねえ　1882-1946

現在の愛知県岡崎市に生まれる。桜井曉堂に西洋木版を学んだ後、1906年に東京美術学校西洋画科撰科を卒業。1907年には美術文芸誌『方寸』創刊に参加。翌年には「パンの会」のメンバーにもなる。1912年に渡欧後、モスクワに滞在してロシアの農民美術に関心を持ち、1916年に帰国。1917年日本美術院洋画部同人となるが、1920年には他の洋画部同人とともに脱退し、1922年小杉未醒らと春陽会を結成。この間、1918年に日本創作版画協会を創立。1919年長野県に日本農民美術研究所を設立。1921年からは子どもの自由画運動を展開するなど、多方面に活躍している。1935年の帝展改組にともなって帝国美術院の参与となり、春陽会を退会、新文展に出品するようになるが、1943年春陽会へ復帰した。



※本目録の掲載順番は、必ずしも実際の展示順とは一致しません。

始まりとしての『方寸』

『方寸』は明治末期に刊行された美術文芸雑誌です。西洋のイラスト入り雑誌のようなものを日本でも発刊することを志し、山本鼎、石井柏亭、森田恒友の3人によって1907(明治40)年に創刊されました。その後、小杉未醒(放菴)や倉田白羊らを同人に加え、1911(明治44)年の廃刊までに全35号が発行されています。のちに春陽会を結成することになる小杉放菴、山本鼎、森田恒友、倉田白羊たちの繋がりはこのときに強くなっており、『方寸』を春陽会の源流として位置づけることが出来るでしょう。

資料

【方寸】

3巻1号(1909.1)、3巻3号(1909.3)、3巻4号(1909.5)、3巻5号(1909.7)、4巻4号(1910.5)、4巻5号(1910.7)、4巻6号(1910.8)、4巻8号(1910.12)、5巻1号(1911.1)、5巻2号(1911.3)、5巻3号(1911.7)
発行所＝方寸社　平成5年度購入

春陽会結成

春陽会は1922(大正11)年に結成された、現在も続く洋画団体です。結成当初は、日本美術院洋画部を退会した小杉未醒(放菴)・足立源一郎・倉田白羊・森田恒友・山本鼎らに梅原龍三郎を加えた創立会員と、木村荘八・中川一政ら草土社系の画家や、日本美術院研究所で学んでいた今関啓司・山崎省三などが客員として参加していました。院展や二科会のように反官展を標榜するのではなく、各人の個性を発表することに重きを置いた春陽会は、以来、毎春の展覧会における素描室や挿絵室の設置、一時舞台美術部を設けるなど、独自の活動で画壇に特異な位置を確立していきました。

01020008

小杉未醒（放菴）《泉（断片）》

1925（大正14）年頃
カンヴァス／油彩　95.0×100.0 cm　平成4年度寄贈

01020009

小杉未醒（放菴）《泉（断片）》

1925（大正14）年頃　カンヴァス／油彩　115.0×103.0 cm　平成4年度寄贈
解説：1923（大正12）年は春陽会の第1回展が開催された年であると共に、東京帝国大学（現・東京大学）に新築される安田講堂の壁画制作が小杉未醒に依頼された年でもありました。この年5月の第1回春陽会展に、小杉は早速（壁画稿『泉』）を出品しています。当館の《泉（断片）》は、壁画制作の助手をつとめていた水谷清（放菴の娘婿）のもとから伝わってきた作品。この春陽会展出品作を安田講堂廊下用の壁画として発展させたものの、失敗に終わってしまった作品『報知新聞』1925年2月23日夕刊に図版掲載）から切り取られた断片と考えられます。

01020007

小杉未醒（放菴）《泉》

1925（大正14）年頃　カンヴァス／油彩　179.0×363.0 cm　平成4年度寄贈
解説：1925（大正14）年に完成した東京帝国大学（現・東京大学）安田講堂には、舞台に大壁画《湧泉・採果》、廊下に半円形の小壁画《動意》《静意》が設置されました。ただし、小杉未醒が『東京朝日新聞』1924（大正13）年8月26日のインタビューに答えた時点では、画題は大壁画《成熟》、小壁画《土》《泉》の三部作とする予定になっていました。翌年2月24日には、『報知新聞』夕刊にインタビュー記事が載り、その時点でも廊下の壁画は《土》《泉》となっています。そのまま描き進められ、完成したのが本作《泉》です。完成直前の写真が、雑誌『アトリエ』1925年4月号に掲載されており、小杉日記を追うと、完成後、安田講堂玄関の廊下に設置するべく大学まで運ばれていたことがわかります。ところが、この年4月くらいより大壁画の制作に入ると、小杉はこの《泉》の要素を大壁画へと入れたくなり、廊下への設置を中止してしまいました。大壁画完成後、小壁画は《動意》《静意》へ画題を変更され、一度は設置直前にまで至った《泉》はそのまま陽の目を見ることがなかったのです。本作はその後ながらく巻かれた状態で保管され、1992（平成4）年に小杉放菴のご長男・小杉一雄氏から日光市へ寄贈されたものです。

01020003

小杉放菴《浦島》

1947（昭和22）年頃　第42回春陽会展［1965年］小杉放菴遺作室
カンヴァス／油彩　96.0×66.8 cm　平成4年度寄贈
解説：1965（昭和40）年、第42回春陽会展では、小杉放菴の一周忌を偲び、遺作の特別陳列がなされました。小杉放菴記念日光美術館が所蔵する未完の油絵《浦島》《良寛》

《静物》や、素描《つくば山畠》《一碧湖》も、このときに展示された作品でした。陳列は素描が中心であったように、批評家の田近憲三は、「小杉放庵とその素描」を『日本美術工芸』1965年8月号に寄せ、力強い油彩画ばかりが並ぶ展示室のなかで、多くの画家たちが忘れてしまった、そのいつくしむような描写にとても強く惹かれた、とその感動について記しています。

01020005

小杉放菴《静物》

1955（昭和30）年頃　第42回春陽会展［1965年］小杉放菴遺作室
カンヴァス／油彩　42.0×85.5 cm　平成4年度寄贈

01020004

小杉放菴《良寛》

1958（昭和33）年頃　第42回春陽会展［1965年］小杉放菴遺作室
カンヴァス／油彩　90.0×48.9 cm　平成4年度寄贈

01040034

小杉放菴《つくば山畠》

1948（昭和23）年作　第42回春陽会展［1965年］小杉放菴遺作室
紙／コンテ・淡彩　17.0×10.0 cm　令和元年度寄贈［笠木實旧蔵］

01040007

小杉放菴《一碧湖》

1951（昭和26）年頃　第42回春陽会展［1965年］小杉放菴遺作室
紙／コンテ・水彩　15.0×20.5 cm　平成14年度購入

0102-NPAoJ36

山本　鼎《秋の白馬岳》

1932（昭和7）年頃　国立公園洋画展/第12回春陽会展［1934年］
カンヴァス／油彩　65.2×80.3 cm　平成24年度寄贈

0102-NPAoJ07

足立源一郎《愛別岳・比布岳》

1953（昭和28）年作　カンヴァス／油彩　65.2×80.3 cm　平成24年度寄贈

0102-NPAoJ61

梅原龍三郎《朝の仙酔島》

1932（昭和7）年頃　カンヴァス／油彩　65.2×80.3 cm　平成24年度寄贈

03030001

倉田白羊・中西静男《ぶどう園》

1938（昭和13）年作　カンヴァス／油彩　47.4×55.6 cm　平成7年度寄贈
解説：1936（昭和11）年7月、小杉放菴の仲介により月50円の月賦払いでの作品依頼を受け、2年かけて制作された大作です。当時、倉田白羊は糖尿病で目を患っていたため、弟子の中西静男を指導し、第14回春陽会展に出品した10号の油彩画《朝の葡萄園》を拡大模写させました。白羊は本作完成後、間もなく1938（昭和13）年11月29日に亡くなります。依頼者からの支払いはそれまでずっと続いていましたが、実はこの依頼は、白羊の病気療養費を放菴が用立てるべくついた嘘でした。白羊没後、放菴は遺族へ事情を説明し詫げる書簡を送っています。

個人蔵

田中善之助《静物（りんご）》

1925（大正14）年頃　カンヴァス／油彩　38.7×46.0 cm　平成24年度寄託

個人蔵

木村荘八《卓上花》

1917（大正6）年頃　板／油彩　23.4×32.3 cm　平成24年度寄託

0104sk0008

木村荘八《室内婦女（習作）》

1929（昭和4）年作　第7回春陽会展出品作の習作
紙／鉛筆・墨・水彩　14.8×21.4 cm　平成10年度寄贈

01020070

木村荘八《歌妓支度》

1930（昭和5）年作　第8回春陽会展
カンヴァス／油彩　150.0×180.5 cm　平成26年度購入

0104sk0009

木村荘八《歌妓支度（習作）》

1929～1930（昭和4～5）年頃　紙／墨・朱墨　14.8×21.8 cm　平成10年度寄贈

0104sk0010

木村荘八《歌妓支度（習作）》

1930（昭和5）年作　カンヴァス／木炭　24.5×38.0 cm　平成10年度寄贈

0104sk0011

木村荘八《新宿駅（習作）》

1935（昭和10）年作　第13回春陽会展出品作の習作
紙／鉛筆・水彩　17.2×24.6 cm　平成10年度寄贈

01020054

今関啓司《伊豆の海》

1938（昭和13）年作　カンヴァス／油彩　60.6×72.7 cm　平成18年度寄贈

01020055
今関啓司《断崖と海》
 1941（昭和16）年作　第19回春陽会展 カンヴァス／油彩　60.6×72.7 cm　平成18年度寄贈
資料
今関啓司旧蔵資料群
 平成18年度寄贈
解説 : 小杉放庵記念日光美術館では、平成18年度に今関啓司のご遺族から、今関の作品とあわせて、旧蔵の資料群もご寄贈いただきました。資料群のなかには、春陽展の目録や画集、ポスターのほか、春陽展出品作品を中心とする膨大な絵葉書が含まれていました。現存していない作品も多く、これらは当時の図像を伝えてくれる貴重な資料となります。

資料
木村荘八旧蔵資料群
 平成10年度寄贈
解説 : 小杉放庵記念日光美術館では、春陽会事務局で長年保管されていた木村荘八資料群を平成10年度に寄贈していただきました。荘八は同会事務を担当していたこともあり、資料群のなかには、同会の刊行物、事務ノート、春陽会の新進画家たちによる麓人会の展覧会目録など、春陽会の歴史を考えるうえで貴重な資料が含まれています。

資料
春陽会資料
 個人蔵
解説 : 石井鶴三・上野春香・中川一政・木村荘八・小杉放庵の随筆を集めた『春陽会随筆五人』（第一書房、1940年）、戦後まもない時期にガリ版刷りで刊行された稀少な『春陽会ニュース』、春陽会の若手画家たちによる機関誌『春陽』の「小杉放庵追悼号」など。

資料
山崎省三《第五回春陽会展覧会ポスター》
 1927（昭和2）年作 紙／リトグラフ　53.3×39.5 cm　平成18年度寄贈〔今関啓司旧蔵〕
資料
作者不詳《第七回春陽会展覧会ポスター》
 1929（昭和4）年作　紙／木版　53.3×39.5 cm　平成18年度寄贈〔今関啓司旧蔵〕

資料
中川一政《春陽会 20 年展ポスター》
 1942（昭和17）年作 紙／リトグラフ　57.5×44.0 cm　平成18年度寄贈〔今関啓司旧蔵〕
資料
坂口右左視《第二回彩塵会美術展覧会ポスター》
 1928（昭和13）年作　紙／木版　71.3×36.5 cm　平成18年度寄贈〔今関啓司旧蔵〕
解説 : 彩塵会は春陽展に出品していた中堅画家たちにより、1927（昭和2）年に結成された洋画団体。数年の間毎年1月に丸善で展覧会を開催しました。会員は今関啓司、岩崎又二郎、国盛義篤、栗田雄、坂口右左視、別府貫一郎、水谷清、村上高雄、本木錦三郎、山崎省三など。

資料
水谷　清《第三回彩塵会展覧会ポスター》
 1928（昭和13）年作　紙／木版　74.0×46.0 cm　平成18年度寄贈〔今関啓司旧蔵〕
01020071
加山四郎《農家》
 1943（昭和18）年作　第21回春陽会展 カンヴァス／油彩　40.9×60.6 cm　平成27年度寄贈
01020072
加山四郎《ノコギリ》
 1971（昭和46）年作　『朝日ジャーナル』1971年12月24日号表紙絵原画 カンヴァス／油彩　60.6×72.7 cm　平成27年度寄贈

0102-NPAoJ74
三岸節子《天草》
 1956（昭和31）年作　カンヴァス／油彩　80.3×65.2 cm　平成24年度寄贈
0102-NPAoJ78
原　精一《桜島》
 1968（昭和43）年作　カンヴァス／油彩　65.2×80.3 cm　平成24年度寄贈
資料
笠木實旧蔵資料群
 令和元年度寄贈
解説 : 笠木実（1920-2018）は 1951 年に春陽会賞受賞、1955 年に会員となり活躍した画家です。当館では笠木旧蔵の放庵素描『つばし山島』を令和元年度にご遺族からご寄贈いただき、機関誌『春陽帖』を始めとする資料類も寄贈していただきました。同誌 39号（1962年）には、笠木が新潟県赤倉まで放庵を訪ねた取材記が掲載されています。

0102-NPAoJ78
原　精一《桜島》
 1968（昭和43）年作　カンヴァス／油彩　65.2×80.3 cm　平成24年度寄贈

資料
笠木實旧蔵資料群
 令和元年度寄贈
解説 : 笠木実（1920-2018）は 1951 年に春陽会賞受賞、1955 年に会員となり活躍した画家です。当館では笠木旧蔵の放庵素描『つばし山島』を令和元年度にご遺族からご寄贈いただき、機関誌『春陽帖』を始めとする資料類も寄贈していただきました。同誌 39号（1962年）には、笠木が新潟県赤倉まで放庵を訪ねた取材記が掲載されています。

個人主義への志向

油絵にこだわらず、日本画・水墨画の出品も認めるなど、個人主義を尊重していた点が、春陽会の他団体と大きく異なる特徴でした。例えば森田恒友は、「日本」画や「西洋」画という言葉を嫌い、画家はその時々の芸術的要求によって材料を選び良い作品を生み出していくだけという信念を持っていました。また第1回展に「水墨・素描室」が設置されたことに象徴されるように、春陽会での「素描」とは、習作や下絵ではなく、油絵や日本画と同等の位置にあり、ときに描く行為そのものを意味する概念でもありました。恒友は、コンテによる作品を「乾墨画」「乾墨素描」、水墨画を「水墨素描」と呼び、〈何れも私の考えて、素描の意をもって描いたものなのです。私は自分の毛筆の筆を、常に素描の意をもって作ります。時に色を用いても、同じく素描の意をもって作ります〉と語っています（『墨画小感』『みづ糸』1924年4月号）。

01010037
森田恒友《緑野》
 1920年代　絹本着色、軸装　132.0×42.0 cm　平成8年度購入

01010088
小杉放庵　画　横山大観　詞書《後赤壁賦》
 1930（昭和5）年作　第8回春陽会展 紙本着色墨書、卷子　36.8×465.8 cm　平成13年度購入
詞書釈文 : 長江繞郭（ちょうこうかくをめぐりて）/知魚美（さかなのびなるをしり）/好竹（こうちく）/連山（やまにつらなり）/覽筍香（たけのこのかんばしきをおぼゆ）/大観
詞書現代語訳 : 長江が城郭をめぐり流れていることで魚のうまさを知り　立派な竹筴が山に連なっていることで筍の香りを感じるのだ
解説 : 画題は、中国北宋の詩人・蘇軾（1036～1101、蘇東坡とも）の漢詩「後赤壁賦」。内容に即した絵と詩が交互につながりあわされています。巻頭の詞書には小杉放庵の友人だった横山大観が、やはり蘇軾による「初到黄州」からの一節を書いています。蘇軾は詩文によって政治を諷諍したとの罪により黄州へ左遷され、そののち「前赤壁賦」「後赤壁賦」を詠んでいることから、大観の書から放庵の書画へ、蘇軾本人の境遇にあわせた流れになっています。大観と共に日本美術院の再興に参加した放庵は、1920（大正9）年に院を脱退してしましますが、大観との交友はその後も続いており、その関係を物語る貴重な事例でもあります。

徳見寺蔵
小杉放庵《石上》
 1933（昭和8）年作　第11回春陽会展 紙本着色、襖絵　各176.8×91.8 cm　平成19年度寄託
釈文 : 山居賦/山にしてわが見はるかす久方の天が下には秋みてりけり/ひとりいく一すぢ路の草やまに白みてかかろひるの月かも/秋山に何おもしろのこのあればあけびの口は笑みひらきたる/山石の上に高あぐらしてまねきなば寄りても来べきあきの雲かな/わがのらばのりたるままに舞ひのぼり雲路をわきて飛べよ大石/酔ひぬればひとりとはさびしこの山のやま姥もかも出て酌とれ/山の秋をひとり籠もりて西東いづれの雲にわれはなげかむ/あしびきのやまの湯壺のさびしらにわがまはだかの老をかつ見る/さもあらばあれこの山の下にしてやまを守りて老もはてなむ

徳見寺蔵
小杉放庵《閑庭春禽》
 1944（昭和19）年作　第22回春陽会展 紙本着色、襖絵　各176.8×91.9 cm　平成19年度寄託
解説 : 徳見寺は、戦国の武将・織田信長が、琵琶湖を望む安土山に築城した安土城内に、自らを祀らせるために建立したと伝えられる寺です。創建当時は大伽藍を誇り、安土城が炎上した際にも災禍を逃れましたが、1854（嘉永7）年の火災で三重塔や仁王門などを残して焼失して以来、仮本堂のまま存続していました。小杉放庵は、本堂再建のために奔走していた徳見寺の松岡範宗和尚（1870-1953）と出会い、その活動に協力します。本堂再建には至らなかったものの、1933（昭和8）年の信長公三五〇回忌にあわせて行われた仮本堂の大々的な修理にあわせ、小杉が襖絵の制作を始めたのです。1944（昭和19）年までに5点描かれた襖絵は、それぞれ《石上》《竹林》《日の出》《山行》《閑庭春禽》と題され、小杉が好んだ花や鳥、石上の人物といったモチーフが組み合わされています。

個人蔵
小杉放庵《保呂保呂鳥》
 1936（昭和11）年作　第14回春陽会展 紙本着色、額装　73.5×90.0 cm　平成18年度寄託

01040008
今関啓司《もの言わぬ野夫》
 1925（大正14）年作　紙／コンテ　35.0×25.2 cm　平成18年度寄贈
0104ik0625
今関啓司《母子（妻と利根美）》
 1933（昭和8）年作　紙／コンテ　75.0×59.0 cm　平成18年度寄贈

資料
今関啓司《ドテラハ屈イタ。》
 1934（昭和9）年作　紙本着色、額装　21.1×29.0 cm　平成18年度寄贈

釈文: ドテラは屈いた。一馬 あつし やんこう げんきであそんでいるそうで安心した。ばくもげんきだ。二十日にはかへる。このエの右にある大きいのが小松やだ　このニかいにいるのだ。／ここからふじさんは見えないが　このあたりにある。／山ばかりのところだ。うまいものがいい。／東京行の電車はこの木の下の方を通り、すぐトンネルに入る。／今日は雪がふりそうだ。山ぐにの子供はつよいぞ。

解説: 今関啓司は一年の半分以上は画題を求めて旅をしていたといいます。この書簡は、1934年12月に山梨県北都留郡大原村猿橋（現・大月市猿橋町各町）での取材旅行中に、家族へ送ったもの。一馬は長男、あつし（敦）は二男、「やんこう」はヤンヤンと言うのが口癖だった長女の利根美のことでしょう。「ドテラ」は和服の上に羽織る防寒着で、この月12日の今関日記に「ドテラ来る」とあり、この直後に本書簡が書かれたものと考えられます。

今関啓司《牛爪切る図》
 1943（昭和18）年頃　紙本着画淡彩、軸装　80.0×57.0 cm　平成18年度寄贈
釈文 : 冬田に人牛つどい牛爪切るを見る　南総朝生原の山村　啓司

今関啓司《花》
 1940年代　紙本着画淡彩、軸装　168.5×48.0 cm　平成18年度寄贈
釈文 : 茫々光陰過　時既晩秋　房内暮色漂　枯花哀愁有　旅人亦何所行　啓司/利根川畔於半倒房
現代語訳 : 年月はまたたく間に過ぎ　季節はすでに晩秋となった　夕暮れの部屋で　枯れた花には哀愁がある　旅人はまた何処へ行くのか

挿絵という芸術

文学と関わりの深い画家が多いことも、春陽会の特徴でした。美術文芸誌『方寸』の編集にたずさわった山本鼎、挿絵や装幀を数多く手がけた小杉未醒(放菴)や木村荘八などです。第1回展以来、水墨や素描室を設けてきた春陽会は、1927(昭和2)年の第5回展で新たに、また団体展としては初めて「挿画室」を設け、挿絵を文学の付随物ではない、独立した芸術作品として、その社会的地位の向上につとめました。

01010058-01010069
小杉未醒（放菴）《挿絵》12点
 1920年代　紙本着画、額装　各22.0×14.5 cm　平成10年度購入
0108sk0199
木村荘八《パンの会》
 1927（昭和2）年頃 吉井勇「大東京繁昌記（127）大川端（五）」『東京日日新聞』1927年8月13日夕刊附絵あるいは『現代漫画大観　漫画明治大正史』（中央美術社、1928年）口絵のための習作 紙／墨　18.2×23.0 cm　平成10年度寄贈

0108sk0201
木村荘八《パンの会》
 1927（昭和2）年頃 吉井勇「大東京繁昌記（127）大川端（五）」『東京日日新聞』1927年8月13日夕刊附絵あるいは『現代漫画大観　漫画明治大正史』（中央美術社、1928年）口絵のための習作 紙／墨　18.5×22.6 cm　平成10年度寄贈

0108sk0233
木村荘八《里見弴「風炎」（第26回）挿絵》
 1948（昭和23）年作　紙／鉛筆・インク・彩色　16.5×12.0 cm　平成10年度寄贈

0108sk0237
木村荘八《里見弴「風炎」（第58回）挿絵》
 1948（昭和23）年作　紙／インク・彩色　16.5×12.0 cm　平成10年度寄贈

0108sk0251
木村荘八《佐藤春夫「泰淮面舫納涼記」挿絵》
 1949（昭和24）年作　紙／インク・鉛筆・彩色　16.2×12.0 cm　平成10年度寄贈

0108sk0253
木村荘八《舟橋聖一「花の生涯」挿絵（習作）》
 1952（昭和27）年作　紙／インク・鉛筆　14.7×20.2 cm　平成10年度寄贈

0108sk0002
木村荘八《『東京繁昌記』単行本扉絵》
 1958（昭和33）年作　紙／墨・インク・水彩　13.5×18.8 cm　平成10年度寄贈

0108sk0003
木村荘八《『東京繁昌記』単行本目次カット》
 1958（昭和33）年作　紙／墨・インク・水彩　24.2×33.2 cm　平成10年度寄贈

0108sk0108
木村荘八《『東京繁昌記』「戦後十年東京風俗」挿絵》
 1955（昭和30）年作　紙／墨・インク　28.0×19.5 cm　平成10年度寄贈

躍進する版画家たち

春陽会は、そのルーツに山本鼎や小杉未醒(放菴)らによる版画を多用した美術文芸誌『方寸』があり、版画と縁が深い団体でもありました。第2回展では早くも河野通勢が銅版画を出品して春陽会賞を受賞。1926(大正15)年の素描室新設時には版画作品も並んで陳列され、翌年の第5回展に古川龍生が初入選。そして 1928(昭和3)年の第6回展から、満を持して版画室が設けられました。この年に会員に迎えられたのが、滞仏中だった長谷川潔

で、以後、日本を代表する銅版画家として活躍していきました。

日光市蔵
古川龍生《昆虫戯画巻　争鬭篇　群中密談》
 1979（昭和54）年後刷〔浅香文紀による〕　初版：第11回春陽会展〔1933年〕 紙／木版　37.5×10.5 cm　手塚登久夫コレクション
日光市蔵
古川龍生《机上の花束》
 1956（昭和31）年作　第33回春陽会展 紙／木版　24.0×26.5 cm　手塚登久夫コレクション

日光市蔵
長谷川　潔《サン・ポール・ド・ヴァンスの村》
 1929（昭和4）年作　紙／メゾチント　13.5×18.0 cm　手塚登久夫コレクション

日光市蔵
長谷川　潔《アレクサンドル三世橋とフランスの飛行船》
 1930（昭和5）年作　第9回春陽会展〔1931年〕 紙／メゾチント　16.8×30.1 cm　手塚登久夫コレクション

日光市蔵
長谷川潔　《オレンジと葡萄》
 1932（昭和7）年作　紙／メゾチント　16.1×29.0 cm　手塚登久夫コレクション

日光市蔵
長谷川　潔《玻璃球のある静物》
 1959（昭和34）年作　紙／メゾチント　35.4×25.3 cm　手塚登久夫コレクション

日光市蔵
長谷川　潔《メキシコの鳩》
 1966（昭和41）年作　紙／メゾチント　26.0×34.5 cm　手塚登久夫コレクション

日光出身、もう一人の春陽会画家

春陽会創設の立役者だった小杉放菴。そして戦後の春陽会を牽引した入江観。この二人が共に日光出身であったことに、不思議な縁を感じずにはいられません。《風車売》は27歳、フランス留学直前の、入江にとって初期代表作の一つです。春陽会準会員に推挙された翌1962年の第39回展、また同年宇都宮市で開催した個展に出品されました。この個展時には、《風車売》の地平線の処理について、〈一挙に抽象の世界に自己を開放する安易さを避け、作者はあくまで具象の道すじを通して、この困難にいどむ〉と鋭く評されています（『栃木新聞』1962年7月28日）。

01020044
入江　観《風車売》
 1962（昭和37）年作　第39回春陽会展 カンヴァス／油彩　90.9×72.7 cm　平成16年度寄贈
01020045
入江　観《ぶらんこ》
 1962（昭和37）年作　第39回春陽会展 カンヴァス／油彩　130.3×97.0 cm　平成16年度寄贈

01020047
入江　観《バスを待つ》
 1974（昭和49）年作　第51回春陽会展 カンヴァス／油彩　100.0×100.0 cm　平成16年度寄贈

01020050
入江　観《トスカーナの樹》
 1995（平成7）年作　第72回春陽会展 カンヴァス／油彩　130.3×162.1 cm　平成16年度寄贈

01020053
入江　観《森の小径》
 2001（平成13）年作　第78回春陽会展 カンヴァス／油彩　130.3×162.1 cm　平成16年度寄贈

01020075
入江　観《湖畔陽浅》
 2004（平成16）年作　第81回春陽会展 カンヴァス／油彩　130.3×162.1 cm　平成29年度寄贈

01020085
野見山曉治《海のものとも》
 1983（昭和58）年作　第6回六月の会展 カンヴァス／油彩　78.8×98.2 cm　令和3年度寄贈
解説 : 戦後の日本洋画界の第一線で活躍し、100歳を超えてなお制作を続けた野見山曉治氏は、1942～1943（昭和17～18）年の第20～21回春陽会展に入選したことがあります。本作は、入江観氏のフランス留学時代からのご友人というご縁から、令和3年度に野見山氏御本人から当館へ御寄贈いただいた作品で、本展が寄贈後初公開となります。